
太陽の魔女

怜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽の魔女

【Nコード】

N6990M

【作者名】

怜

【あらすじ】

魔女と、その弟子の話

僕は太陽は白いと思っていたが、ある日ロザが「いや黄色い」と言い出し、よく考えるとそうかも知れないと思うようになった。太陽をまともに見つめたことなどないのだが、なんとなく僕の頭の中にあるそれが、黄色く輝いているような気がした。

「もつとも、ずっと黄色いってわけじゃないよ」と彼女が言う。「あんたの言うとおりで、白いときもあるだろうさ。だけど基本は黄色のはずだよ。ある日には白に近い黄色だったり、黄色に近い白だったりするだろうさ。誰かが塗り替えたみたいに、色が変わってくるんだ。沈むときや、昇るときの赤色もいいね……」

ロザは魔女であるが、珍しく太陽を好んだ。だいたいの魔女は月を好む。

「月も悪くはないけど……あれは、静か過ぎるね。波がない」

「波ってのはなんだい」

「太陽風の揺らぎさ。そもそも月ってのはなんで光る？　そう、太陽の光を跳ね返してるからさ。そのとき光と波は変化する。『月のもの』になっちまう——鎮まった、別物にね。少しくらいまぶしい方が好きなんだ」

僕とロザは旅をした。彼女の言う、太陽風の揺らぎに身を任せた旅立った。僕は彼女の導くままに動いた。しかし実際のところ、彼女はなにも考えていなかったのではないかと思う。

それは僕にしても同じで、まったく何も考えず、するべきことが見つからなかったから、彼女とともに旅に出たのだ。ある日の朝、電車に乗って僕らは東を目指した。

「東はいい方向だ。始まりの方角だよ。そうだ、酒持ってきた？」

「ああ、たんまりとね。やるかい」

「もちろんさ。太陽に乾杯しよう」

出発してすぐにほとんど金はなくなった。しかたないので駅や、路上で寝た。

真夜中。新聞紙を引いて裏路地に寝そべる。月が青色に光っている。

「こうやって野宿していると昔のことを思い出すよ」

「どのくらい昔？」

「一世紀くらい」

魔女がどれだけ生きるのかほんとうの所は知らない。千年生きた魔女もいたらしいけど、僕は会ったことがない。

「昔と今は比べてどう？」

「同じだよ。じゃっかん、騒がしくはなったかもしれないが」

「そうかい？ 劇的に変わったんじゃないかな」

「そうでもないさ……あたしみたいなの、何も考えてない人間にとっては。日を浴びて、寝て、酒を飲んで終わりだ……百年間ずっとそうして来たんだ。月の魔女たちはちょっと違う。あいつらは熱心だからさ。悪魔と話をするんだよ」

「悪魔と？」

「ああ。悪魔は夜にしか出てこないから、あたしはなかなか話す機会がないけれど。あいつらはわけ分からない言葉で話すからさ、それを勉強しないといけないわけ。それはこの世界の言葉じゃないからさ、ずーっと聞いてると狂うわけ。健康には良くないさ。それに悪魔どもは、態度でかいからな……いろいろ知ってはいるんだけどね。まあ、あたしは代わりに精霊とかと話すけど」

「精霊？」

「大気とか、草とか、あとはお日様の光。それから火とかさ……そういうところに宿るものがあるんだ。交わすのは言葉じゃないけど、『もうじき雨が降る』みたいなことが、ぼんやりと分かるのさ。占いっていうかね。だから、昔は魔女は働き口がたくさんあったんだ。どっかの貴族のお抱えになりゃ、食うには困らなかったしね。けど今は違うだろ？ 天気予報があるしさ、機械でどうにかなること

のほうが多いわけ。それに、気難しい魔女を雇う金もバカになんないしな。もっとも、あたしみたいな働く気がない魔女には関係ない話だけどね……『昔と同じ』って言ったのはそういう意味だよ」
「なるほど」

僕らはあるとき、草原の中央で寝た。

焚き火をロザがじっと見つめて、動かなくなった。しかたないので一人で飲んでると、一時間くらいしてから彼女は我に返った。

「……南へ行こうか。そっちがまあ、吉だな」

「話してたのかい」

「ああ、あと休んでた。ちょっとでかい火と話すのは疲れるんだ……だから例えば山火事とか、あるいは油まいて燃やした火とかと話して入り込むと、困った事態になるかもしれないね」

「どうなるんだい」

「心が焼かれる。まあ、死ぬっていうか」

「そいつは怖いな」

「怖いさ。火は怖いよ。太陽も火だ、世界で一番でかい火。だから真っ直ぐ見たら、いけないんだ」

長い時間をかけて僕らは大陸の、南の果てにたどり着いた。

青い空の下、紺碧の澄んだ海が広がっていた。

さんさんと光が降り注ぐ砂浜で、ロザは黒い外套を着たまましばらくたたずんでいた。

「到着だ」と、彼女は言った。「あんたにはすべてを教えた。ここで旅は、おしまいさ」

「そうかい」僕は言う。「教えてもらってないことが、いろいろあるんじゃないか」

「ほんとうに大事なことは、教える必要がないのさ。最後に飲もうか」

僕らは安っちいワインで乾杯した。ロザは瓶を手し、海の中へ入

っていく。

「まあ、またどこかで会おうじゃない、我が弟子シキよ。どこか日の光が当たるところでね」

そうして彼女は、波を掻き分けてワインを呷りながら進んでいき、真っ黒い影みたいなその姿がぼやけたと思ったら、陽炎みたいに消えてしまった。

僕は一人、砂浜で残っていた酒を飲んで、日が沈むころ、帰るところにした。

そうして僕は、この奇妙な師匠と別れた。あれから一世紀以上過ぎたが、未だにロザとは再会していない。僕は彼女と別れたときから歳を取らないまま、まだ旅を続けている。

太陽は相変わらず、黄色く——ときには違う色で——光っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6990m/>

太陽の魔女

2010年10月8日14時10分発行